

前回までのあらすじ

流遠るとおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。
学校があつて、友達がいて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘たちばなアサト、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。彼等はゼヘナを危機に陥おとしれている別の敵性体——〈ブレケース〉の存在を知り、その打倒に協力する事となった。

しかし状況は推移し、〈ブレケース〉は姿を潜め、入れ替わるように新たな脅威が現れた。機獣を思わせる特徴を備えた、蠍さそりの姿を模したそれは群れを成し、やみひめ達の滞在するオオミヤ・シテイを蹂躪した。

そしてそれは、ファフロウ姉妹達が向かった〈エリアD〉にも姿を現していた。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

空は良い。

風を切り、雲を見下ろし、正面にはひたすら青い色が広がっている。

遮蔽物がなく、思いのままに速度を上げてても、建造物に激突する心配はなく、衝撃波で周囲に迷惑をかける事もない。

ロゼ・レオーネは〈機獣少女〉だ。それも、珍しい飛行型である。

しかし、珍しい事と重宝される事がイコールで結ばれるとは限らない。〈機獣少女〉とは〈カタストロ〉を殲滅するための存在であり、主戦場は〈シエネレーター〉が設置してある人口密集地、もしくはその付近である。そのために〈機獣少女〉の戦闘スタイルは、周辺に被害を与えにくい近接戦闘が主流となった。地球の戦闘機と同じく、高速飛行で地上の目標と交戦する場合、会敵は一瞬。再度会敵する場合、大きく旋回し、それを繰り返さなくてはならない。これは燃料の問題も含め効率が悪いし、周囲に高層建築物があれば激突する危険性も発生する。加えて、周囲への被害を考慮しない爆撃やミサイル攻撃——ゼヘナには現存しないが——も出来ないとなれば、飛行型の存在意義はないに等しい。

必要十分に戦えても、飛行型の本領を発揮する機会は〈機獣少女〉の戦場にはないので。だから、こうした飛行訓練や哨戒任務という口実でもなければ、飛行型のMBデバイスと契約した〈機獣少女〉が、思う存分飛び回る事は出来ない。

それを可能にしてくれる空は良い。

翼を持たない人間に、本当の意味で空を飛びたいという欲求はない。これはあくまで、飛行型の機獣のコアの欠片を納めたMBデバイスの、『飛びたい』という欲求を代わりに解消しているに過ぎない。

しかし——

「空は良い——」

何時からか、ロゼはそんな気持ちをもMBデバイスと共有するようになっていた。MBデバイスになる前、機獣としての機体を持っていた相棒は、当時の搭乗者と共に大空を飛んでいたのだろう。それを少しでも羨ましく思う。

「いくよ、〈赤〉——」

『了解』

愛機に呼びかけ、ロゼはイメージでスロットルを開く。加速し、操縦桿を引いて急上昇。MBジャケットに展開されている不可視の防護膜と書き換えられた肉体によって、感じるはずのない気圧の変化と急激な加重をイメージする。エンジンを切って自由落下。地上が見えたら姿勢制御し、再び加速する。見世物の曲技飛行ではやらせてもらえない出鱈目な機動。

「ははっ！」

空は良い。戦場ではなく、此処こそが自分の居場所だと実感する。

「次はスプリットS、いつてみようか！」

『——いつてみようかじゃないわよ、お馬鹿さん』

上機嫌なロゼの耳朵を打ったのは、MBデバイスに内蔵されている通信機を介した声だった。マッハ0・9程度の巡航速度に移行し、周囲を見渡すと、後方左上に飛行物体を視認——声の主だ。ロゼと同じく飛行型MBデバイス持ちの〈機獣少女〉である。

上昇し、相対速度を合わせ、彼女と並んで飛ぶ。

「ヴィオレ、なんか不機嫌？」

『ええそうよ』

ロゼが隣に並んで飛行中の〈機獣少女〉——ヴィオレ・モニターニュに訊ねた。年齢はロゼと同じ年——十六、七歳くらいに見える。

互いの顔の表情が見える距離だが、会話は通信機で行う。どれだけ〈機獣少女〉が常人離れた状態でも、高高度を飛行すれば肉声など聞き取れない。ロゼの声も、ヴィオレには通信機を介して聞こえているはずだ。

「へ紫。お前のマスター、調子悪いのか？」

『健康面に関する不調は見受けられず。ただ、精神面におけるストレスは上昇中』

ロゼの問いに、ヴィオレのMBデバイスは生真面目に答えた。

「ヴィオレ……悩みがあるなら言えよ？ アタシでいいなら話くらいは聞くからな？」

友人の心配をし、しかし無遠慮に踏み込む事はしない、自分は気遣いが出来る人間です

——そんな表情を浮かべるロゼに、ヴィオレはイラっとした表情を返した。

『……友人に、私の言う事をまったく聞いてくれない子がいてね』

「それはよくないな」

通信機越しに始まった友人の悩み相談に、ロゼはまず同意した。こういう時は、相手を肯定してあげるべきだと何かの番組で言っていた。

『私と同じ飛行型の〈機獣少女〉 なんだけど』

「……お、おう」

前述の通り、飛行型の〈機獣少女〉は珍しい。少なくともロゼには、ヴィオレと共通の友人に飛行型の〈機獣少女〉はいない——自分以外。

『その子ね、一緒に飛ぶ時は勝手に曲技飛行しないでって何度も言ってるのに、まったく聞いてくれないのよ』

「……………」

ヴィオレのジトつとした目がロゼを射抜く。さすがに誰の事を言っているのか気付く。
『……どう思う?』

「えっと……きつとその友人に悪気はないと思うんだ。だから広い心で、ロゼちゃん・の・自・主・性・を・尊・重・し・て・あ・げ・る・方・向・で……」

『そうよ、あんたよ! もう我慢の限界だわ! 何度も何度も同じ事を言わせて……いつそ超低空飛行からスプリットSすればいいのよ!』

「それ、地面とキスしちゃうから!?!」

ヴィオレが両肘に収納されているレーザー・ブレードを展開し、振り下ろす。さすがにレーザーを発振してはいないものの、飛行中にそんな物で殴られれば失速してしまう。ロゼは咄嗟にかわしたが、レーザー・ブレードはもう一振りある。逃げ道を塞ぐように振り下ろされるそれを、ロゼは空中で身を捻り、ヴィオレとポジションを入れ替わるように回避した。

「甘いよ、ヴィオレ! 天定まっつて亦能く人に勝つ!」

『こんのおおッ!』

挑発するロゼが加速し、ムキになったヴィオレが追跡する。二人の飛行型〈機獣少女〉が互いにもつれ合い、いわゆる『シザーズ』という空戦機動を観客のいない空で披露する。

「……ん? ちょ、ちよつと待った!」

『何よ!?! 今更謝つたつて……』

ロゼの視線の先にあるものを見て、ものすごい剣幕だったヴィオレの言葉が途切れた。目を凝らし、強化された視力で見た先には、大陸の大部分を占める荒野が広がっている。それ自体は当たり前前の風景。其処にぽつんと建っている巨大な正三角錐の建造物も知っている。この周辺は立ち入りを禁じられた『封鎖区域』で、それ故に航空機の航路からも外れている。それは飛行型の〈機獣少女〉であつても例外ではないのだが、航空機を気にせず飛べるという理由から、ロゼはこの空域を好んで飛んでいた。それに付き合われるヴィオレにしてみれば迷惑な話だが。

『あれ、戦闘じゃない?』

ヴィオレも視認したらしい。正三角錐の建造物の近くで、〈機獣少女〉らしい人影が、見覚えのない何かと交戦している。

「〈ブレイクス〉じゃない。(カタストロ)とも違う。何だ、あれ……」

両者とは大きさからして明らかに違う。東方大陸には生息していないが、蠍を何百倍にも大きくしたような姿で、生物というよりも機械に見える。

(……機獣……)

無意識にそんな言葉が浮かぶのは、惑星ゼヘナの住人であれば自然だろう。〈機獣少女の相棒であるMBデバイスの本来の姿。かつて、人間と共に在った者達。

『あれって、〈獅子王〉と〈竜帝〉よ！ どうしてこんな所に……』

ヴィオレは目が良い。ロゼにはこの距離では判別出来ないが、彼女の目にははっきりと地上で戦っている〈機獣少女〉の姿が見えているのだろう。

〈機獣少女〉でなくとも、この二人を知らない者などそうそういない。二つ名は実力と人氣を兼ね備えた者にのみ与えられる称号であり、その中にあるてなお別格とされている。

問題は、そんな彼女等がなぜ、こんな場所にいるのかだった。



蒼い髪の少女が戦っている。

見た目は十四、五歳。小柄で、髪は短く、ともすれば少年のようにも見える中性的な容姿。装備は動きやすさを重視した軽装で、ファンタジー世界の村娘とでも形容すれば伝わるだろうか。装甲の類は一切なく、生地も普通の布である。少なくとも、戦場に立つ服装ではない。

〈獅子王〉アイナ・ボーグマンは無心だった。

この無尽蔵に現れる蠍の化物は何なのか。

地割れで生じた穴に消えたベアトリーチェ、タオエン、キリエは無事なのか。

考えたところでどうにもならない。
考えている余裕もない。

今この場にいる自分達が生き残る事で精一杯だ。

そういった諸々をすべて思考から捨て、アイナはひたすらに得物を振るい続けた。

両手に握ったそれは、誤解を恐れず言えば出刃包丁に似ている。無論、それは単純な形状の話で、武器として取り回しやすく最適化されている。幅広い刀身は金色で、柄を含めた機械的な意匠は、SF作品に登場しそうな印象すらある。

双剣型のMBデバイス〈ビィエル〉はレーザー・ブレードなので、刀身がレーザーを発振し続ける限り、切れ味が鈍る事はない。通常の剣やカタナと比べるとやや短い、小柄で身軽なアイナにはむしろちょうどいい。素早い動きで相手に肉薄し、死角である胴体の下に潜り込み、二対の腕と四対の節足を次々と斬り落としていく。

何体倒した？

残りは何と何体だ？

そんな事も考えない。

数える事に意味などないし、残りを数えても絶望するだけだ。

逃げ場はなく、意思の疎通も不可能となれば、どちらかが滅びるまで戦うしかない。

それがシンプルで原始的な、太古からの生存競争のルール。

そうやって生き残り、淘汰された者達の屍を超えていった種が繁栄する。

ただ、それだけの事。

此処で自分達が倒れても、残った者達が志を継いでくれる。そうやって次代に託し、人間は世代を重ねてきた。

自分もその礎となるだけだ。

それでいい。

それでいい——のか？

……………。

「いいはずがない…………！」

人間が無心になどなれるはずがない。

感情と欲望があるのが人間だ。

無心など、心を殺しているだけだ。

人間が人間のまま、『無の境地』に至ったり、悟りを開く事など不可能なのだ。

それが出来る、出来てしまったら、それはもう人間ではない。

帰りたい。

生きて逢いたい人がいる。

だから——

「っ！」

腰を落とし、腰部に装備されたロケットブースターを作動させる。急激で無理矢理な加速によって、一瞬で景色が後ろに流れていく。ロケットブースターの燃焼が終わり、ほとんど浮いていたも同然だった両脚を地面に下ろし、加速の勢いを殺して振り返る。アイナの通過した跡に、蠍の化物だったものの残骸が大量に散らばっていた。

何かした覚えはない。ただレーザー・ブレードの出力を最大まで上げ、敵陣に突入した。その当然の結果が残っただけに過ぎない。

「……………はあ……………はあ……………はあ——」

肩で息をする。その間にも、蠍の群れは湧いてくる。

今のでかなり減らしたつもりだったが、むしろ増えたような気さえする。

だが、それでも――

「……ん？」

頭頂部にある獣のような耳がぴくりと動いた。MBジャケットを展開し、機獣少女となった時にだけ生えるアイナのそれは、普段であれば拾えないような音や振動にも反応する。見上げれば、遙か上空を旋回する飛行物体。高度から見ても鳥ではない。この空域を飛行する航空機も、公には存在しないはずだ。

だとすれば――

紅い髪の少女が戦っている。

女性としては長身で、豊満なスタイルと漂う色香から、ともすれば二十代にも見える。女性士官の軍服を思わせる紺色のスーツとミニスカート姿からは、戦場ではなく指令室にふんぞり返っているイメージが浮かぶ。緩く波打つ長い髪を弄びながら、失態を犯した部下を舐めるように糾弾するのだ。やはり銃弾が飛び交う戦場には似合わない。

〈竜帝〉ルイゼ・ルンシュテッドは苛立っていた。

自分達の乗ってきたホバーカーゴ・トレーラーは離脱させた。アイナと二人で防衛しきるのは不可能だったし、搭乗して振り切れるようなスピードも出せない以上、安全圏に出るまで敵を足止めする必要がある。すでに時間は稼いだので、トラブルさえなければオミヤ・シテイまでたどり着けるだろう。

地下に消えた同行者達も心配ではあるが、少なくとも自分達よりはマシンな状況のはずだ。彼女等なら高所から落ちて死ぬ事はないだろうし、地下なら周囲を敵に囲まれたりもしていないだろう。

そうでなくとも、現状では他人の心配などしている余裕はない。今からトレーラーに追いつくのは不可能だし、敵を殲滅するのも同じくだ。足枷となる防衛対象がなくなった今でも、その判断は変わらない。

敵――機械を思わせる蠍の化物の群れは増殖を続けているのだから。

「ああもう――」

群がってくる蠍の群れに得物を突き立て、切断し、切り裂く。時には相手の動きを封じ、投げ飛ばし、盾として使ったりもした。

ルイゼのMBデバイス〈ジービー〉は、言ってしまえば『カニバサミ』だ。楕円形に近い盾に一对の特殊合金製の刃が上下に収納されており、それが展開されると蟹の鋏のよ

うな形状となる。それが両腕に装備されれば結構な重量のはずだが、少女の細腕でも自由自在に扱えるのは、偏に肉体の書き換えによる強化の賜物だ。

「鬱陶しい連中ですわね！」

すぐ手の届く範囲にいた敵を薙ぎ払うと、両脚の踵にあつた突起を地面に下ろし、自身も姿勢を低くすると――

「アイナ！」

この場に残った唯一の味方に警告を発し、ルイゼは光線を放った。

放たれた光の奔流は蠍の群れを貫き、そのままコンパスで半円を描くように左に振られ、射線上にあつた一切合切を飲み込んで消失した。

荷電粒子砲。

それはルイゼのMBデバイス〈ジービー〉を始めとする、特定のテイラノサウルス型の機獣が装備していた、通常兵器としては最大級の威力を誇る光学兵器の総称である。これまでは未知の部分が多すぎるといふ理由と、対〈カタストロ〉戦においては過剰な装備だといふ判断から、実装はされなかった。

しかし、状況が変わった。

地球からの転移者、クラウ・P・ブランのMBデバイス〈ラインハイト〉の解析によって得られた荷電粒子砲のデータ。そして、〈フレケース〉を超える脅威が現れる可能性の兆し。

これらの理由から、稀代の技術者ロゼット・コダールが荷電粒子砲を現代に蘇らせた。ルイゼはその搭載ケースの第一号となる。

「……これは……なかなか――」

覚悟はしていたが、やはり荷電粒子砲を撃った反応は大きい。自動で両脚のアンカーが収納され、MBジャケット各部の分割線が開いて冷却機構が作動するのを確認しながら、ルイゼは機力の消耗の大きさを実感していた。

正直――つらい。

「まったく、無茶をする」

背後から耳馴染んだ声がした――アイナだ。

なるほど、荷電粒子砲の照射の巻き添えを避けるなら、確かに其処がもっとも安全圏だろう。自分と同じで疲労困憊といった様子だが、外傷はなさそうだ。

「よかったですわ、アナタが無事で」

ルイゼが苛立っていたのは、絶体絶命の状況にではない。それにアイナが含まれている事に対してだった。

〈戦姫〉カナコ・T・シングウジから連絡を受けた時は悩んだが、アイナの同行が決定済みであれば是非もない。危険が伴うかもしれない案件なら尚更だ。

とはいえ、〈ブレイクス〉襲来を経験した今、それ以上の修羅場に遭遇する事などないとたかを括っていたのも事実だ。それがこんな事になるなど、完全に想定外だった。

「ふん。お互い様だ」

「まあ、嬉しい。ワタクシの事も心配してくださったんですね」

拗ねるような口調の友人に軽口を返し、ルイゼは覚悟を新たににする。

彼女だけは死なせない——と。

「何を決心したか知らんが、あれを見ろ」

ルイゼの内心を——詳細までは判らずとも——読んだのか、心なしか呆れたようにアイナは視線を上空に向けた。周囲への警戒は維持したまま、ルイゼも彼女の視線の先へ目を向けた。

「あれは……飛行型の〈機獣少女〉？」

「そのようだ。なぜ、こんな空域を飛んでいるのかは知らんが」

かろうじて飛行物体が人型であると判る。なら、それは飛行型の〈機獣少女〉以外にありえない。数は一人。ライトか何かの光が明滅している。恐らく発光信号だろう。

「……当方ニ……救出ノ……準備アリ……」

「判るのか？」

「ええ、多少は。ええと……救出ノ……必要ノ……是非ヲ……問ウ」

『助ける準備がある』『必要かどうか答えろ』——上空の飛行型〈機獣少女〉のメッセージはそんなところだ。

「何を当然の事を!？」

「彼女等も状況を把握しかねているのでしようねッ！」

しびれを切らしたのか、包囲網を少しずつ狭めていた蠍の群れから、血気盛んな者が続々と押し寄せてきた。互いの死角をカバーするように、自然と背中合わせで対応する。

「すぐに助けると伝えろ！ 長くはもたん！」

「そう言われても、伝える手段が……」

ルイゼもアイナも、照明器具の類を持っていない。自分達の意思を伝える術がないのだ。一応試したが、なぜか通信機からは雑音しか聞こえない。だからこそ、上空の〈機獣少女〉も発光信号などを使ったのだろう。

「ならば……!」

アイナは左手のレーザー・ブレードを地面に突き立て、もう片方のレーザー・ブレード

で敵を薙ぎ倒しながら、不可思議な動きをして見せた。そして一度は地面から得物を抜き、再び突き立てて不可思議なルートを疾走し、また抜き、もう一度繰り返した。

そこでようやくアイナの意図を理解した。

「そういう事ですか!」

大きく後方に跳躍し、着地と同時に発射体制に移行。

荷電粒子砲の第二射を撃つ。

地表を削ってしまわないよう注意を払い、邪魔な蠍を一掃する。

これで上空からでも自分達のメッセージが伝わるはずだ。

万国共通の救難信号——すなわち、アイナが地表に刻んだ特大の『SOS』の文字。

「……はあ……はあ……」

さすがに限界だ。二度目の冷却作業を開始するMBジャケットだが、冷却が追い付かないのか熱が伝わってくる。

「本当に無茶をする奴だ!」

片膝を着いて動けないルイゼをガードするように、アイナが群がってくる蠍を蹴散らす。その背中が頼もしく、たまらなく愛おしいと感じる。

出来るなら、この関係がずっと続いてほしいとすら思う。

「……………?!」

呆けている時ではない。上空からの新たな発光信号。

「……全速デ……北ニ……向カワレタシ……」

それを伝えると、上空の機獣少女は身体を何度か揺らし、加速してすぐに見えなくなった。

「どうなった?!」

「全速で北に向かえと!」

背中で見かけけるアイナに答えると、飛行型機獣少女が姿を消したのとはまるで異なる方向から、別の飛行物体が高速で迫ってきた。それは一瞬で視界を通過し、衝撃波を巻き起こし、遅れて爆音が轟いた。超音速飛行によって発生する衝撃波が生む大音響。

ソニックブーム。

「——!」

荒れ狂う衝撃波の中、アイナが何か叫んでいるが、聞こえるはずがない。ただ、言っている事は予想出来る——走れ!

(「ジービー」)。機力をすべて推進系に回しなさい)

契約を結んだMBデバイスとは、不可視の経路によって念話が可能となる。一種のテレ

バシード。ルイゼの指示に従い、最低限の防護機構のみ維持し、残りの機力が背部の推進器を稼働させる。

身体が地上からわずかに浮き、ホバー走行に移行する。衝撃波とソニックブームによって大わらわとなった蠍の群れを突つ切り、北に向かつて進む。

アイナも健在だ。ロケットブースターによる爆発的な加速でルイゼを追い抜き、燃焼が終わると自力での走行に移行し、その背中が少しずつ近づいてくる。

後方を見ると、蠍の群れとはかなり距離が開いていた。

だが、いつまでもこの速度は維持出来ない。やがては追い付かれる。

不意に——浮遊感に襲われた。

「——へ？」

全身が掬い取られるような不思議な感覚。

足場の感触が消え。

気付けば空を飛んでいた。

「……………」

『——あなたは冷静ね。前方の彼女みたいに暴れられても困るけど』

通信機から声が聞こえた。あの場を離れたためか、正常に機能している。

ルイゼはようやく気付いた。猛禽類が地上の獲物を攫うように、自分は今、誰かに背後から抱えられている状態だと。その誰かが先の通信相手で、自分をあの場から救出してくれたのだと。

前方に視線を向ければ、銀色の翼を有して飛ぶ《機獣少女》と、彼女に抱えられているアイナの後ろ姿。彼女が暴れている理由は空を飛んでいる事——ではなく、高所恐怖症のためだろう。ああ見えて、高い場所が苦手なのだ。

高度は上空三百メートルくらいだろうか。風を切る音がやかましく、何も聞こえない。なるほど、通信機を使う訳だ。

「助かりましたわ。ワタクシは——」

『知ってる。ルイゼ・ルンシュテッド。有名人だもの。私はヴィオレ・モンターニュ。アイナ・ボーグマンを抱えているのがロゼ・レオーネ』

『——おいこら、《獅子王》！ 暴れんなって！』

『——高い所は駄目なのだ！ 降りしてくれ……!?!』

通信回線が前方を飛んでいる二人の声も拾う。なにやら向こうは大変そうだ。

「……あれ、失速したりしませんの？」

『まあ、大丈夫じゃない？』

自分を抱えてくれている〈機獣少女〉——ヴィオレの口調は投げやりだが、それはアイナを抱えている〈機獣少女〉——ロゼに対する信頼の表れだと感じた。

『それより、あんな場所で何してたの？ あの蠍さそりみたいな連中は何なの？』

ヴィオレの疑問は当然だろう。何から説明すべきか、そもそも説明していいものか、危機を脱したばかりのルイゼは、ゆつくりと考えを巡らせた。

「……っ!？」

突如、強烈な悪寒が奔はしった。心臓を直じかに驚わしづか掴みされるような不快感。

「……何ですの、この嫌な感じ——」

敵意や嫌悪——そういった、ありとあらゆる負の感情が視線となって突き刺さったような感覚。

その視線は遥はるか後方——先ほどまで戦場としていた方角から向けられている。

次の瞬間、ルイゼが幻視したのは、大きく反そり返った蠍の尾と、その先端から発射される荷電粒子砲の禍々まがまがしい光だった。

「——!？」

ルイゼが幻視したものを、アイナもまたイメージとして視みていた。先ほどの蠍さそりと同質の、しかし圧倒的なまでの上位存在。それが自分達の命を刈り取るべく放った破滅の光。

「ルイゼッ!？」

『——判ってますッ!』

根拠はないが確信があった。そして、通信機から聞こえたルイゼの返答が、それは正しかったと証明した。ルイゼもアイナと同じものを幻視していたのだと。

「しつかり握っている!」

『はあ!？ 何する気だ馬鹿やめ——』

自分を抱えている飛行型〈機獣少女〉——たしか通信ではロゼとか聞こえた——に一応だが忠告をし、返事は無視して腰部のロケットブースターに緊急点火する。あと一回くらいは使えるはずだ。

とりあえず射線上から外れば方位は何どこ処でも構わない。今まさに発射される寸前であるなら——

『すおおおおっ!』

まっすぐだった飛行中に予備動作なしの真横への加速がかかり、ロゼが驚愕のあまり奇妙な悲鳴を上げているのを聞きながら、構わず右へ右へと針路をずらす。

極大の光が予想していた射線上に奔ったのは、次の瞬間だった。

「……………ッ!？」

先ほどルイゼが放った荷電粒子砲とは比べるべくもない威力と射程に、アイナは戦慄を覚えた。直撃でなくとも、掠れば半身が消し飛ぶだろう。もし、あのままの飛行コースを維持していたら…………。

「! ルイゼ! 何処だ!？」

意外にも短かった荷電粒子砲の照射が終わり、アイナははつとしてルイゼの安否を気遣った。彼女は後方を飛んでいたため、射線上から回避するところを確認していない。

「返事をしろ、蜥蜴女!」

「…………大声出すなよ、〈獅子王〉。通信機越しでも耳に響く!」

ロゼのうんざりした声が届く。やや雑音も混じっており、若干だが聞き取りづらい。

『ん? また調子悪いな。今の光線のせいか…………?』

荷電粒子砲の影響というのにはあり得るだろう。だが、アイナにしてみれば今はどうでもいい。

「それより——!」

『わーってるよ。〈竜帝〉さんなら無事だ。ほら、前方10時の方向!』

アナログ時計の十時の位置を思い浮かべ、正面に向けていた視線を左に振る。

——いた。

無事を示すためか、飛行に支障を来さないように軽く身体を振ってみせる飛行型〈機獣少女〉——あちらはヴィオレという名だっただろうか——と、彼女に抱えられているルイゼの後ろ姿が見えた。

こうして見ると抱えられている方は間が抜けて見えるが、それは自分も同じなのだろう——その程度の思考が出来るくらいには、アイナは冷静さを取り戻せていた。

『——なあ、訳の判らない事のオンパレードなんだが?』

通信機越しに聞こえるロゼの言いたい事は判る。逆の立場なら、アイナもロゼを質問攻めしたかもしれない。

「まずは礼を言う。だが、今は一刻も早く状況報告をしなければならぬ。このままオオミヤ・シテイまで送ってもらえないだろうか?」

凶々しい事を言っているのは百も承知だ。ロゼにしてみれば、こんな厄介な荷物はすぐにでも放り出したところだろう。だが、アイナの殊勝な態度に気を良くしたのか、彼女

はあっさりと了承してくれた。

『そんなじゃ飛ばすぜえ！』

「——ッ!？」

ロゼの宣言とほぼ同時に、急激な荷重Gに襲われた。自分のロケットブースターとは比べ物にならない加速に晒さらされ、これが音速飛行かと実感しつつ、アイナは意識を失った。

音速のせいではなく、眼下を流れる景色によって此処ここが高所である事を思い出してしまったために。

『Catch you later!』

ロゼが上機嫌で何か叫んでいるようだったが、無論、意識を失ったアイナの耳には届いていなかった。

第二十七話

『アラシノヤイバ』

清掃が行き届いた廊下を進みつつ、橘^{たちばな}アサトは改めて自分の場違いさを感じていた。胸元にはロゼット・コダールから渡された入館証^{I D}が下げられている。地球からの転移者である彼は、共に転移した二人の少女共々、此処^{ここ}へL. C. ファクトリー^Iに身を寄せる事となり、その際に渡された物だ。

予想外の事態に遭遇した街から戻り、やや緊張しつつ入^{エントランス}口^{I D}で受付に入館証^{I D}を提示した。恐らく、アサトだけなら、『なんで男子高校生が？』程度に思われるだけで済んだだろう。だが、同行者に〈戦姫^{せんきょ}〉と〈難攻不落^{なんこうふらく}〉——ちなみに彼女等は顔パスだった——がいれば、『この男子高校生は二人とどういふ関係性だ？』と思われるだろう。そして、下世話な想像をされるに違い。にこやかに送り出してくれた受付嬢二人の、背中から突き刺さる好奇の視線からして間違いない。

自分がどれだけ悪評を流されようが、実害さえなければ知った事ではない。だが、自分のせいで二人の評判を下げてしまうのは、さすがに申し訳ない気持ちになるアサトだった。「私達、絶対に特殊な関係だと思われているでしょうね」

この施設に不慣れなアサトに代わって先導してくれている〈戦姫〉——カナコ・T・シングウジが、つまらなそうに呟^{つぶや}いた。

アサトより一つ年下の十七歳。黒瑪瑙^{オニキス}のような伶俐^{れいり}な黒い瞳。長い黒髪のサイドを切り揃^{そろ}えた『姫カット』が良く似合う、純和風な〈機獣少女〉。

そして、アサトの妹かもしれない少女。

「そんな。私、小学生ですし……」

カナコの呟きを、アサトの隣を歩いていたツバキ・タカチホが、苦笑気味にやんわりと否定した。

本人の発言通り、彼女は小学五年生である。穏やかな色を湛^たえた、蒼玉^{サファイア}のような青い瞳。セミロングの黒髪を左側で結^ゆったサイドポニー。小柄な体躯。

丁寧な口調と大人びた澄まし顔が違和感なく似合っているが、見た目だけなら普通の小学生である。知らない者が見れば、彼女が〈難攻不落^{なんこうふらく}〉と呼ばれる名^なうての〈機獣少女〉だとは信じられないだろう。まあ、普通の小学生とは一線を画した部分もあるのだが。

「……小学生なのが余計に問題なんだよな」

「……そうですね」

物憂げに言葉にするアサトと、嘆息気味に同意するカナコ。これ以上この話題を続けるべきではないと判断したのか、ツバキは苦笑を浮かべ、

「やみひめさん、きつと心配されていますよ」

と、話題を移した。

〈ブレケース〉撤退を受け、ベアトリーチェとタオエンは調査のため、封鎖区域〈エリアD〉に出入。手が空いているアサト、カナコ、ツバキは街に。やみひめとクラウは検査やMBデバイスの解析のため〈L. C. ファクトリー〉に残った。

「……かもな」

アサトの意外な返事に、ツバキは少しだけ驚いた。素直に肯定されるとは思わなかったのだろう。

「二応、話しておいた方がいいかもな——」

アサトの口調にただならぬものを感じたのか、ツバキだけでなく、前を歩いているカナコも首だけで振り返って続きを促した。

タオエンが開いた『門』^{ゲート}でツバキが惑星ゼヘナに帰還し、まるで紅いフィルターがかかったようになっていた世界が元の色を取り戻すと、大きな変化が起こっていた。〈カタストロ〉に意識を奪われ疑似的な〈機獣少女〉と呼べる状態となっていたクラウとの戦闘の傷跡を始め、〈カタストロ〉関連の一切合切が何の痕跡も残さずに『なかった事』になっていた。

人為的な情報操作や証拠隠滅ではない。やみひめの両親すら、親戚として泊まり込んでいたツバキの事を知らなかった。忘れているのではなく、彼等はツバキと出会っていないのだ。

この世界には〈カタストロ〉もツバキも来ていない——そう改変された。

そして、改変された事に誰も気付いていない。

アサトとやみひめを除いて。

「クラウ・P・ブランは、此方^{こちら}に来てから改変前の事を思い出したんですね？」

「ゼヘナに転移する直前、クラウは以前のMBジャケット姿になった。ひよつとしたら、その時には記憶が戻ったのかもしれない。大した差じゃないけどな」

カナコの確認するような問いに、アサトは当時の状況を思い出しつつ答えた。

「あれだけの事が起きたのに、全部がなかった事にされて、それを認識してるのは俺とやみ子だけ……ようやく学校に行ける程度には落ち着い、当時は恐慌状態だった」

「……………」

ツバキは神妙な面持ちで何も言わない。

知り合ってから日が浅いアサトでも、彼女がどういう人間か知っている。見知らぬ星で初めて出会い、短いながらも共に暮らした恩人が、知らぬ間に大変な状況に陥^{おちい}っていた。それを知った今、ツバキが心中穏やかでいられるはずがない。

「今はこの状況で気が張ってるだろうから、それどころじゃないだけで、まだ完全に元通

りとはいかないはずなんだ。少し離れるくらいなら大丈夫だと思ってたんだが——」

〈カタストロ〉とも〈ブレイクス〉とも違う、機械を思わせる蠍さそりの化物に襲われた。事なきを得たが、現場におらず情報だけしか入らなければ、やみひめが不安で情緒不安定になっていてもおかしくはない。

「……すみません。やみひさんがそんな状態なのに、私——」

「知らなくて当然だ。言わなかった俺が悪い」

予想通りの反応だったので、アサトはツバキの言葉を最後まで言わせなかった。実際、ツバキにもカナコにも責任はない。やみひめを置いて、街に行く事を了承したのはアサト自身なのだから。

「……………」

とはいえ、そう割り切れる性格じゃない事も知っている。やはりツバキは思いつめた表情を崩してくれなかった。優しいだけではなく、責任感が強いのだろう。だから他人の責任まで背負しよいこもうとしてしまっつ。

まだ小学生にも関わらず、本当に難儀な少女だ。

「——ツバキ」

先導してくれていたカナコが歩みを止め、振り返って、ツバキと視線を合わせるように腰を落とした。

「あなたは悪くない。自分でも判ってるはずよ。それなのにツバキがそんな顔をしていたら、たらばな橘さんが困るだけだし、私も悲しいわ」

ぽん、と左手を添え、カナコは駄目押しするようにツバキの髪を優しく撫なでた。

「ね？」

「……………そうですよね」

ツバキがようやくやく、少し困ったような笑みを浮かべた。

「ええ。そうよ」

アサトの位置からは見えなかったが、きっとカナコは、妹をあやす姉の表情をしているはずだ。

「橘さん、談話室は左に曲がって突き当りです。急いで行ってあげてください」

こちらには振り返らず、カナコは言外に『ツバキの事は私に任せてください』と背中告げてくれている。

「判った。……カナコ、君は良いお姉さんだな」

「……………違いますよ」

カナコの返答を謙遜けんそんと受け取り、アサトはやみひめの待つ談話室に向かった。

アサトが談話室に向かい、もう顔を背ける必要がなくなっても、カナコはその姿勢から動けずにいた。

「橘さん、もう行きましたよ」
たちばな

ツバキの優しい口調が逆につらい。

すぐ目の前で自分を見つめているであろう優しい眼差しが見られず、俯うつむいてしまう。そのどちらも、自分には与えられる資格がない。

「……ごめんなさい。あなたを口実ダシにして」

ツバキのためにこの場に留まるように振舞った。だが、実際には自分のためだ。

アサトがやみひめに優しくするところを見たくなかった。

彼と初めて会った時から意識していた。

彼の言動がいちいち気になった。

彼に触れられてドキドキした。

彼と街を歩いて、話をして、公園で食事をして——楽しかった。

実の兄でも、違っていても、すでにアサトはカナコにとって、特別な感情を向ける対象になっていた。

ツバキはそれに気付いている。

だからこうして、カナコに付き合ってくれている。

これでは、どちらが姉か判らない。

「——いいですよ」

不意に向けられたツバキの言葉。その『許し』が自分だけに向けられたものではない気がして、カナコは伏せていた顔を上げた。

ツバキは、澄まし顔の次によく見る、少し困った表情でカナコを見ていた。

「……ツバキ？」

「多分、私もカナコさんと同じです。だから……いいですよ」

それはつまり、ツバキもカナコと同じ感情をアサトに抱いているという事。

先の『いいですよ』というのは、『お互い様』という意味で——

「カナコさん？」

思わず吹き出してしまったカナコに、ツバキは怪訝けげんそうな顔をした。笑うところだった

だろうか——そんな顔だ。

「それだと、流遠るとおやみひめの敵になってしまっけど？」

「やみひめさんから奪おうなんて考えていません。ただ、私が勝手に彼を想っているだけです」

「そう。健気ね」

実にツバキらしいスタンスだと思う。実際にそれで満足して、その想いを墓場まで持っている。ツバキ・タカチホとはそういう少女だ。

「カナコさんは違っんですか？」

「違う——って言ったら、あなたは私の敵になるの？」

冗談めかして言ってみたが、内心では冷や汗をかいていた。ツバキは大切に、特別な子だ。彼女の敵にはなりたくない。

「……そればかりは実際にそういう状況になってみないと判りません」

ツバキの答えに、落胆と安堵を同時に覚えた。

否定してくれなかった落胆と、即座に肯定しないでくれた安堵。

とはいえ、これも半ば予想していた回答ではある。

ツバキの性格を誰よりも把握している自負が、カナコにはあるのだ。

「そう。——まあ、いいわ。ロゼットの所に行きましょう。何か情報があるかもしれない」

「はい」

普段通りの澄まし顔で、ツバキはカナコに答えてくれた。

それが堪たまらなく嬉しい。

アサトの事は気になるが、それと引き換えにツバキとの関係を失うとしたら……。

「……えい」

「か、カナコさん……？」

普段のクールなカナコらしからぬ行為——すなわち気安い感じのハグに、ツバキは珍しく戸惑っているようだ。

「——ありがとう、ツバキ。嫌わなくてくれて」

だが、行為とは裏腹に、カナコは口調まで気安い感じには出来なかった。やはり、らしくない事はしない方がいい。

「……嫌う訳ないじゃないですか」

カナコの行為の理由を察してくれたのだろう。ツバキはあえて、気安い口調でそう言ったが、その言葉は紛れもない本心だと判る。

改めて思う。

自分はこの、優しくて、聡^{さと}くて、子供らしさの欠片^{かけら}もない大人びた少女が、可愛くて仕方ないのだ。

つづく

あとがき

どうも、流遠亜沙です。

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十六話をお届け致します。

アバンが思いのほか膨らんでしまい、本編より長いです。

まずはネタですが、『空はいい』——これは『ガオガイガー』ネタです。検索すると予測変換含め、『ガオガイガー』関連がトップを占めていて驚きました。この台詞がここまで有名だとは、正直、思っていませんでした。

で、アバンのトピックスといえば飛行型〈機獣少女〉の二人なのですが、彼女等も元ネタがあります。『ゾイド』好きなら説明不要だと思いますが、そうでない方は『アーラ・バローネ』で検索してください。答えはすぐに出てきます。

あとはアイナとルイゼの〈機獣少女〉姿が初お披露目です。

アイナさんは変身するとネコミミが生えるんです！

言いたい事はそれだけだ！

それでは謝辞で締めたいと思います。

まずはチェックをしてくださっている紙白さんに感謝を。クラウドとロゼットは今回も名前しか出ていないので恐縮です……。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。相変わらず進行がゆっくりですが、お付き合いください。

Catch you later!

2017 / 8 / 11 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る